

# 「読書スピーチ」の有効性と指導の工夫

## －国語力と豊かな人間性の育成－

長期研修員 古田 生美子

Furuta Kimiko

### 要 旨

高等学校国語科で、読書活動に「話す・聞く」・「書く」などの言語活動を取り入れた学習を実践し、「話す・聞く」・「書く」・「読む」の各言語能力の育成を目指す指導法と評価の研究をした。

特に、「読書スピーチ」として、「話し手が選んだ本の内容と感想を述べ、聞き手がスピーチの感想を書く学習活動」を提案した。これは、生徒の知的好奇心を喚起し、主体的学習の体験により、国語力や豊かな人間性の育成を目指すものである。

キーワード： 読書スピーチ、古典スピーチ、今昔スピーチ、国語力、豊かな人間性

### 1 はじめに

国語力は「生きる力」と直結している重要なものである。この国語力を身に付けるためには、生徒一人一人の力に応じた主体的学習を取り入れた授業の工夫が必要となる。そこで、筆者自身の過去20年間の実践、特に、力を入れてきた「読書スピーチ」（「古典スピーチ」・「今昔スピーチ」）を中心に分析し、国語力や豊かな人間性を育成する、読書活動を基礎とした授業内容や効果的な指導法、評価を研究する。

### 2 研究目的

読書活動に「話す・聞く」・「書く」などの言語活動を取り入れ、国語力や豊かな人間性の育成を目指す「読書スピーチ」の指導法と評価を研究する。

### 3 研究方法

- (1) 言語領域別「読書スピーチ」についての整理
- (2) 文献調査（国語教育、読書活動、国語・読書に関する法令・答申・施策・指定事業ほか）
- (3) 過去の実践の分析

### 4 研究内容

- (1) 「読書スピーチ」とは

「読書スピーチ」とは、「話し手が選んだ本の内容と感想を述べ、聞き手がスピーチの感想を書く学習活動」をいう。

読書により、確実に身に付く「読む」力は、「書く」力の土台である。実際、読書量の多い生徒は、文章読解や論述に優れている。しかし、自分の考えや思いを他人に分かりやすく伝える力があるとは限らない。総合的な国語力を育てるためには、伝え合う力を意図的・計画的に学習させる機会を国語科教育の中に設定することもまた必要である。その点、「読書スピーチ」は「話す・聞く」・「書く」・「読む」の言語3領域を網羅している学習活動である。

- (2) 効果的な「読書スピーチ」の三つの留意点

西尾実は、「話す・聞く」力が、「書く」・「読む」力の基礎となると述べている。そこで、筆者は、これま

での20年間、可能な限り、教科書教材の使用以外に「話す・聞く」学習の機会をつくってきた。初期は、「話す・聞く」、続いて「読む」を、ここ10年は「書く」を重視し、それに伴い、スピーチの指導内容も、「自己紹介」・「最近思うこと」・「新聞記事」・「読書」・「古典」・「今昔」(4)及び資料1参照)と変遷した。これらの実践から、効果的な「読書スピーチ」の留意点として以下の三つが挙げられる。

話し手は、原稿(1200字程度)を作成し、本の内容や感想について3分間語る。
1分間300字から400字が聞き取りやすい速さのため、原稿は最大字数を目安とする。
聞き手は、メッセージカードに感想を書く。
話し手は、友人の感想を文字で確認することができ、聞き手は、スピーチを聞く集中力が高まる。
1時間の授業での発表者は、1、2名とする。
毎時間、授業開始から10分間程度を学習時間とし、約1学期間継続(帯学習)する。

(3) 「読書スピーチ」の具体的方法 10の学習活動

表1は、最近実践した「読書スピーチ」の具体的方法と10の学習活動である。効果的な「読書スピーチ」の三つの留意点に対応する必須の学習活動は、選書・読書、原稿作成、発表、「メッセージカード」(太字)である。それ以外の学習活動は取捨選択し、生徒の実態や指導目標に応じた工夫が可能である。

表1 「読書スピーチ」の具体的方法と国語力 10の学習活動(太字は必須、 から は授業中に実施)

話し手	聞き手	話聞 すく	書 く	読 む
<b>選書・読書</b>				
原稿準備(「読書カード」又は「読書レポート」)				
<b>原稿作成</b> (「スピーチのまとめ」・「 <b>原稿用紙</b> 」)				
発表準備(作品名・作者名・発表者氏名の板書)	「スピーチ記録」の記入(内容は話し手の板書事項)			
<b>発表</b>	「スピーチノート」(大意・感想)の記入			
「スピーチのまとめ」 自己評価	「 <b>メッセージカード</b> 」・「スピーチ記録」の記入			
質疑応答・「スピーチノート」へのメモ				
指導者のコメント・「スピーチノート」へのメモ				
「スピーチのまとめ」 メッセージカード				
「スピーチアンケート」				

<事前準備> 学習活動 から

話し手は、「友人も感動しそうな本」を意識し、読みたい本を自由に選び読書する。

話し手は、「読書カード」又は「読書レポート」(指導者が一方を指定)などの原稿準備をする。

話し手は、「スピーチのまとめ」に、スピーチの構想を練り、本の内容や感想について「原稿用紙」1200字程度の原稿を作成する。

<授業> 学習活動 から

話し手は、作品名・作者名・発表者氏名を板書し、発表準備をする。聞き手は、話し手の板書事項を「スピーチ記録」に記入する。授業開始とともに聞く態勢・書く態勢をつくるために、1人目の話し手は、授業開始前に板書を終わることが望ましい。

話し手は、3分間の発表をする。聞き手は、「スピーチノート」にスピーチの大意・感想を記入する。

話し手は、「スピーチのまとめ」 自己評価を記入し、聞き手は、「メッセージカード」(書くことが負担にならない名刺サイズ)と「スピーチ記録」を記入する。「メッセージカード」の記入が終わった生徒は、スピーチの大意・感想の続きを記入する。

スピーチ内容について質疑応答し、それを「スピーチノート」へ記入する。これは、選択科目の少人数の講座やかなり国語力の高い学級での実施となる。

指導者のコメントとその内容を「スピーチノート」へ記入する。

発表は、集中力の持続の点から、毎時間1、2名の発表が適当である。1時間をスピーチのみの授業にすると、後半には集中力が落ちるからである。初回は、「読書スピーチ」の手順の説明が必要なため、学習活動⑦を除いても、20分から25分程度の時間を要する。しかし、回を追うごとに、生徒が手順に慣れるために、毎時間の2名の発表が10分程度で終了できるようになる。

<授業終了後> 学習活動⑨・⑩

- ⑨ 話し手は、授業終了直後に指導者から手渡された「メッセージカード」を中心に、「スピーチのまとめ」Ⅱメッセージカードのまとめをする。
- ⑩ 学級全員の発表が終了した次の授業で、「スピーチアンケート」を実施する。結果は、指導者が集計し発表する。

表2 「読書スピーチ」用語説明

用語	説明
読書カード	作品名・作者名・出版社・ページ数・読書期間・感想を記入したもの。(A4)
読書レポート 古典レポート	「読書カード」の項目をノートやレポート用紙1枚に記入したもの。 Ⅰ：本文、Ⅱ：自分で考えた現代語訳(辞書使用可)、Ⅲ：Ⅱの添削、Ⅳ：語注、Ⅴ：感想(ただし、漢文の場合は、自分で考えた書き下し文とその添削も加える)。
原稿	「読書カード」や「読書レポート」を参考に、原稿用紙1200字程度に書いた文章。
スピーチのまとめ	<b>表1</b> ③ 発表内容の構成＝強調点・間の取り方・スピード・声の強弱などの工夫点 <b>表1</b> ⑥ 自己評価＝100点満点・その理由・発表した感想 <b>表1</b> ⑨ 「メッセージカード」の各欄のまとめと感想 (B4)
スピーチ記録	発表者氏名・作品名・作者名・備考。「話す・聞く」能力を育成する場合のみ、4項目についての5段階評価(4項目とは、1姿勢・態度、2声の大きさ、3スピード、4内容)を加える。「スピーチノート」なしの場合は、発表内容の大意と感想も記入する。(B4又はA4)
スピーチノート	発表内容の大意・感想・質疑応答・指導者のコメントのメモ。
メッセージカード	発表者氏名・記入者氏名・発表者の長所(性格面や行動面)1点・感想3行以上。「話す・聞く」能力を育成する場合は、4項目5段階評価(「スピーチ記録」欄参照)を加える。(名刺サイズ)
スピーチアンケート	Ⅰ：スピーチ(話し方)部門・Ⅱ：内容部門・Ⅲ：総合部門、各1名の選出とその理由。Ⅳ：好きな作品とその理由、Ⅴ：「読書スピーチ」全般の感想。指導者が集計し、次時に発表。(A6)

※注 「読書カード」又は「読書レポート」・「原稿」・「スピーチのまとめ」は個人発表終了後提出。  
「スピーチ記録」・「スピーチノート」は、学級全員の発表終了後のアンケート時に提出。

#### (4) 「古典スピーチ」・「今昔スピーチ」

「読書スピーチ」で、指導者による選書の指定が、特に、古典(古文または漢文)の場合を「古典スピーチ」、近・現代作品と古典の比較の場合を「今昔スピーチ」(資料2参照)と命名した。両者とも原文を扱う場合、ある程度の古典の知識が必要なため、第2学年以降の「古典」や「古典講読」での実施が望ましい。

「古典スピーチ」では、学習活動②(表1参照)が「古典レポート」(表2参照)となる。古典(散文に限定)は作品の一部や段を基本とし、文章の長さが様々なので、枚数制限なしとする。生徒の実態に応じて、古典の現代語訳を読んだ感想のみの「読書(古典)カード」や、自分で考えた現代語訳とその添削なしの「古典レポート」の場合もあり得る。学習活動④の発表準備では、作品の成立年代も板書・記録する。また、紙芝居、一人芝居、板書(授業形式)、掲示物(絵・書)・品物の提示、紙人形など、様々な工夫を凝らした発表は授業を活性化する。生徒の創意工夫が、学習への意欲を高め、古典が面白く身近なものとなる。

「今昔スピーチ」では、学習活動②が「読書カード」又は「読書レポート」と「古典レポート」となる。学習活動⑩の「スピーチアンケート」Ⅳ好きな作品とその理由を、近・現代作品と古典各々について挙げる。

#### (5) 育成を目指す言語能力別「読書スピーチ」の指導案ー指導法と評価

総合的な国語力を育成するために、授業の指導内容や方法を創意工夫する過程で誕生したのが、「読書スピーチ」である。その後の実践や分析の結果、今日では10の学習活動に至ったが、生徒の実態や指導目標に応じた学習活動の取捨選択が可能である。そこで、効果的な「読書スピーチ」の三つの留意点に対応する必須の学習活動を中心に、「話す・聞く」・「書く」・「読む」各能力を重点的に育成する指導案を考えた。

実施時期は、夏期休業中に読書に多くの時間が取れ、学級の間関係がある程度深まる2学期が適当であ

る。まず、1学期末に、2学期に「読書スピーチ」を実施することを予告し、その概要や準備について説明する。夏期休業は、読書や「読書カード」・「読書レポート」の作成、スピーチの構想を練る期間とする。

1時間の授業が、「読書スピーチ」と教科書教材の学習で構成されるため、4月は生徒に無理のない速度で授業を進め、徐々に教科書教材の学習の速度や難易度を上げ、2学期に備える必要がある。

同一科目担当の国語科教員とは、指導や評価などの詳細な事前検討をし、司書教諭や学校司書とは、進め方の打ち合わせ、本の購入や生徒の選書への助言を依頼するなど、他の教員との連携が不可欠である。

大村はまは、読書の楽しみとは、自分で本を選択するところから始まると述べている。この「自分で選ぶ喜び」を味わう選書から「読書スピーチ」は始まる。そして、生徒たちは自ら課題を設定し、計画的に取り組む主体的学習を経験する。「メッセージカード」を10年以上経過しても大切に保存している卒業生がいるように、何より、人の話を聞く楽しさ、本を読む楽しさを知ることは一生の財産となる。最終的には、大村が目指した「読書人（本を使って生きていく人）の育成」を読書指導の目標としたい。

「話す・聞く」能力を育成する「読書スピーチ」 「国語総合」（「国語表現Ⅰ」・「国語表現Ⅱ」・「現代文」）

	関心・意欲・態度	話す・聞く能力		知識・理解
学習活動における具体の評価規準	・目的や場に応じて、表現を工夫して自分の考えを話そうとしている。	・相手を意識し、話し方を工夫することによって分かりやすく伝えている。	・友人の読書体験を自分と比較したり、自己に生かそうとしたりしながら聞いている。	・声の大きさ・発声・話の速度・強弱、身振り手振り・姿勢、言葉遣いなどの発表方法について理解している。
学習活動	・「スピーチ」の準備をする。	・「スピーチ」をする。	・「スピーチ」を聞く。	・「スピーチ」を相互評価する。
評価方法等	・「スピーチ」の準備などの行動の観察	・「スピーチ」の分析	・「スピーチのまとめ」の「メッセージカード」の記述の分析	・「メッセージカード」の5段階評価の分析
指導上の留意点	・先輩のゲストスピーチやプロのビデオ、CDを視聴して、学習意欲を喚起する。	・相手に分かりやすく伝えるためには、身振り手振りなど話し方にも工夫が必要であることに気付かせる。	・友人の訴えたいことを正確に把握し感想を記述させる。	・相手や場に応じた適切な言葉遣いが、美しい言葉遣いであることを自覚させる。
「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だての例	・表現工夫の参考として、先輩やプロのスピーチの優れている点を指摘させ、それを自分の表現に取り入れるよう助言をする。	・効果的な話し方の工夫をするために、テレビのアナウンサーの話し方や動作などを参考にするように助言する。	・友人の読書体験を内面化するために、自分の読書体験との共通点と相違点を意識させるようにする。	・表現技法に気付くように、「メッセージカード」の5段階評価に示された項目に特に着目することを助言する。

「書く」能力を育成する「読書スピーチ」 「国語総合」（「国語表現Ⅰ」・「国語表現Ⅱ」・「現代文」）

	関心・意欲・態度	書く能力		知識・理解
学習活動における具体の評価規準	・目的や場に応じて、自分の考えを文章にまとめたり、効果的な表現を考えて書いたりしようとしている。	・本の内容に関連する自分自身の体験や思索を取捨選択している。	・文章展開の型を利用して、文章を工夫して書いている。	・原稿用紙の正しい使い方を理解し、表記全般について、その知識や技能を身に付けている。
学習活動	・原稿を準備する。	・原稿を作成する。		・自己評価（推敲）する。
評価方法等	・「スピーチのまとめ」の＜発表内容の構成＞の点検	・清書「原稿」の分析		・下書きを推敲した清書「原稿」の点検
指導上の留意点	・分かりやすい構成や表現の工夫について理解させる。	・本の内容と自分自身の体験や思索との共通点や相違点を考えさせる。	・頭括法・双括法・尾括法や、3段構成（序論・本論・結論）・4段構成（起承転結）を説明する。	・教科書の教材を、原稿用紙に視写させ、正確に視写できたか相互評価させる。
「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だての例	・考えを広げることができるように、友人の考えを参考にさせたり、効果的な表現の例を提示したりする。	・書く内容を精選するため、本の中心内容に注目して、それに関連する体験や思索を記述するように助言する。	・文章展開の型に沿って文章を書くために、実例を見せたり、友人と相互検討させたりすることで型を理解させる。	・表記の理解が十分になるよう、教科書の「原稿用紙」の使い方のページを確認させる。

「読む」能力を育成する「読書スピーチ」 「国語総合」（「現代文」・「古典」・「古典講読」）

	関心・意欲・態度	読む能力		知識・理解
学習活動における具体の評価規準	・本を読んで、心情を豊かにし、思考力を育てようとしている。	・読んだ本の内容を簡潔に要約している。	・本を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしている。	・語句について、その意味や文脈の中での使われ方を理解している。
学習活動	・本を読む。		・原稿を作成する	
評価方法等	・スピーチのまとめの<テーマ>の記述の分析		・清書「原稿」の分析 ・「スピーチのまとめ」の<友人の感想を読んで>の記述の分析	
指導上の留意点	・選書の参考として国語便覧 ・文学史の副教材、各出版社発行の小冊子があることを紹介する。 ・テーマを決めて原稿を作成させる。	・本の帯などを参考にして、本を読んでいない人が一読して理解できる要約をさせる。	・読んだ本や、友人の発表についての感想を書かせる。	・語句の意味は文脈から判断するよう助言する。
「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だての例	・思いや考えを深めるため、本から読み取ったことを整理させる。	・要約ができるように、キーワードやキーワードに注目することを助言する。	・友人と自分の思いや考えの共通点や相違点を意識させるようにする。	・語句の理解が十分になるよう、辞書を引くことを指導する。

※注 表題横（ ）内は「国語総合」以外に、各能力が評価の観点となっている科目である。

(6) 「読書スピーチ」と国語力

国語力の「話す・聞く」・「書く」・「読む」の3領域の言語活動に、スピーチ、原稿やメッセージカードを書くこと、読書が対応している。（詳細表1参照）

最近、特に注目されている国語力は「書く力」・「読む力」である。平成17年12月、文部科学省は、PISA A型「読解力」向上のため、①テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取組の充実、②テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取組の充実、③様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実を求めた「読解力向上プログラム」を取りまとめた。また、平成18年2月、中央教育審議会審議経過報告では、子どもの社会的自立のために必要な力としての国語力、「読む」と関連付けた「書く」（文章や資料を読んだ上で、A4・1枚（1000字）で自分の考えをまとめて表現する）力の重要性を強調している。その点、「読書スピーチ」は、これらに該当する学習活動から構成されている。

よって、「読書スピーチ」は、「高等学校学習指導要領 国語 目標」（国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる）を達成できるものとする。

(7) 「読書スピーチ」と豊かな人間性

大村は、読書を心の開拓、創造的生産的なものであると捉え、読書によって、自分が変化し、心に生まれてくるものを育てることや、読み取った内容を自己の日常実践に役立てることが、非常に大切だとしている。また、各生徒の実力に応じて本を割り当てた実践が、責任をもって読書する姿勢を育て、生徒の緊張と誇りを高め、「非常に打ち込んだ読書態度」を育てたという。これは、生徒一人一人に苦手意識を感じさせることなく、しかも、各自の力に応じた充実した学習活動の典型である。

自由選書の「読書スピーチ」でも、発表する本が各々違うことが、各自が真剣にその本と向き合う要因となる。そして、学級のすべての生徒が、人の言葉を心から聞くという貴重な体験をする。つまり、生徒たちの心理・興味・関心、特に自尊心を大切にしている指導者の配慮によって、生徒が真にのびのびと安心して参加できる充実した時間となる。

読書に言語による交流を加えた「読書スピーチ」は、生徒の潜在能力発揮の場ともいえる。自分の考えや思いを音声言語（スピーチ）や文字言語（原稿・メッセージカードほか）で表現する。この意見交換によっ

て、自己理解・他者理解が深まり、ものの見方・感じ方・考え方を広げることができる。メッセージカードに指摘された話し手の性格面・行動面の長所によって、自尊感情が高まり、他者の長所に気付く力を養うこともできる。話し手の人間性が凝縮された3分間は、生徒のみならず、指導者にとっても、一斉授業ではなかなか知り得ない一人一人の生徒の考えや思いを知る、生徒理解が深まる大変貴重な時間となる。

以上のことから、「読書スピーチ」は、人間の思考・情緒の根幹をなす言語を学ぶと同時に、豊かな人間性を育てる学習活動であるといえる。

## 5 研究結果と考察

学習指導要領の平成11年の改訂点は、①2領域1事項から3領域1事項への領域構成の変更、②伝え合う能力の育成、③言語活動の実習の重視、④音声言語能力の育成、⑤「読むこと」の学習の質的な転換の5点である。「読書スピーチ」の特徴である、相手意識や目的意識をもった交流が②を、筋書きがなく、すべてを自分で考える主体的言語学習活動が③を、帯による継続学習が④を、選書・読書が⑤に関係する。このような3領域の言語活動から構成される学習活動が、総合的な国語力を育成するためには不可欠である。

ところが、現在、必履修科目の「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の教科書には、読書＋「書く」学習が多く、読書＋「話す・聞く」＋「書く」学習は少ない。前者の例として、本の紹介文（3例）、本の紹介カード（2例）、ブックカード（1例）、ブックガイド（2例）、本のPR紙（2例）、小説PR文（1例）、書評（1例）、読書の記録「わたしのお気に入りフレーズ」（1例）、読書感想文（1例）があり、後者として、声の発表会「私のおススメBook」（①本の紹介②本文の朗読）の1例があるに過ぎない。そのため、「読書スピーチ」を授業に導入することは、大変意義があると考えられる。

そこで、本研究では、過去20年間で実践効果のあった学習活動や指導を中心に、育成する能力を明確にし、必履修科目の「国語総合」における、より効果的な「読書スピーチ」の指導法と評価を提案した。また、「読書スピーチ」が国語力と豊かな人間性の育成に有効であることを考察した。今後は、生徒の実態に応じて、指導法の実践・検証を試み、更なる研究を継続する必要がある。

## 6 おわりに

平成15年4月から、一定規模（12学級）以上の学校に配置された司書教諭は、読書指導のコーディネーターとして、読書環境を整え、生徒の読書意欲を高め、読書活動を促進する。澤利政が指摘するように、「学校図書館は学校の心臓部である。」という理念に基づき、学校図書館が教育活動の全般にわたって機能するような学校図書館経営を目指すものであると考える。読書を生徒の日常生活により定着させるため、指導者は司書教諭と連携し、「朝の読書」のように、「読書スピーチ」を学校の教育活動へ位置付けることを考慮したい。

生徒の側に立った学習指導の充実のためにも、楽しい学級の雰囲気の中で、「話す・聞く」・「書く」・「読む」能力を、生徒の実態に応じて伸ばすことが可能な「読書スピーチ」を今後も追究していきたい。

## 参考文献

- |                                       |           |         |      |
|---------------------------------------|-----------|---------|------|
| (1) 対話能力を磨く ―話し言葉の授業改革―               | 高橋俊三      | 明治図書    | 1993 |
| (2) 書くことの教育                           | 西尾実       | 習文社     | 昭27  |
| (3) ガレー 作文指導法の原理                      | 高森邦明訳     | 鳩の森書房   | 1979 |
| (4) 大村はま 国語教室第3巻 古典に親しませる学習指導         | 大村はま      | 筑摩書房    | 1983 |
| (5) 大村はま 国語教室第7巻 読書指導の実際1             | 大村はま      | 筑摩書房    | 1984 |
| (6) 大村はま 国語教室第8巻 読書指導の実際2             | 大村はま      | 筑摩書房    | 1984 |
| (7) 平成14年版中学国語観点別学習状況の新評価基準表          | 北尾倫彦・金子守編 | 図書文化    | 2002 |
| (8) 「校務分掌における学校図書館の位置づけ」（学校図書館論 塩見昇編） | 澤利政       | 教育史料出版社 | 1998 |